



〈特別寄稿〉

学生とともに一衣帯水の隣国で学んだこと

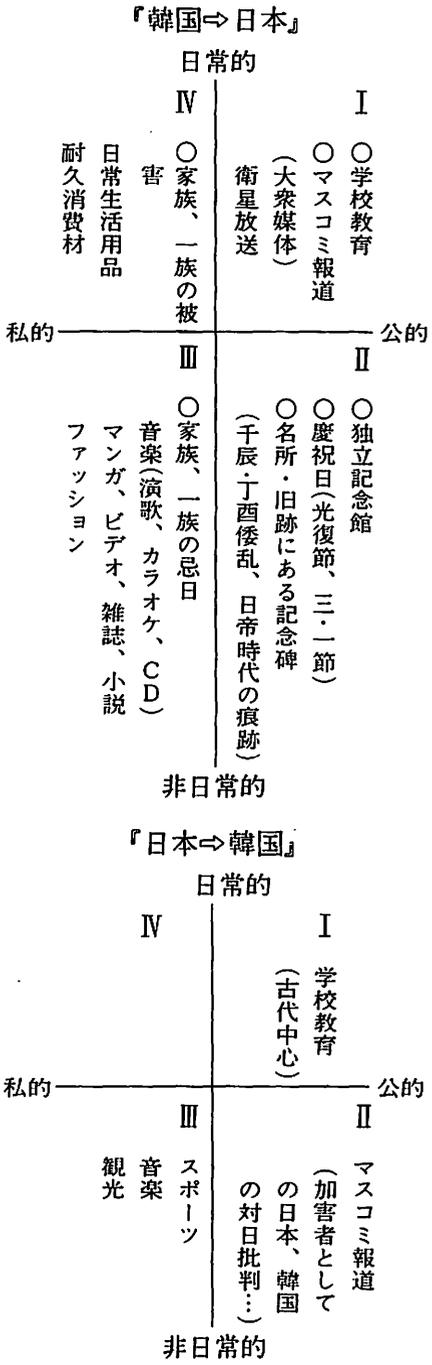
静岡 大学
馬 居 政 幸

「日本に留学しているときは、日本のマンガをそれほど悪いものとは思いませんでした。でも、韓国に帰ってきて、韓国語に訳されたものを見ると、やはり韓国に入れるべきではないと思うようになりました。その理由は……、韓国人としての感情……としか説明できません。」

私は今年のゴールデンウィークの休暇を利用してソウル市を訪問した。目的は、韓国の若者や子どもたちの間に浸透している日本の現代文化（マンガ、アニメ、CD、スーファミ、ファッション等）の現状とそのことに対する研究者や教育関係者の評価について聞き取り調査を行うためであった。この調査過程で、韓国の共同研究者から紹介された日本に留学経験のある二十五才の青年が、私が日本人であることを気遣いつつ、語ってくれたのが冒頭の言葉である。

なぜ、彼の日本のマンガに対する評価は留学中と帰国後で逆転したのか。次の二つの図をみていただきたい。これは、これまでの調査をもとに、日本と韓国における互いの国に関する文化・情報を「公的・私的」、「日常的・非日常的」という二つの軸で分類したものである。まず、両国の情報量に注目していただきたい。「日本⇄韓国」に比較して「韓国⇄日本」の情報が圧倒的に多いことが理解できよう。さらに情報の質の差はより大きい。「韓国⇄日本」の図が示すように、I、IVの全ての領域において、韓国における日本の情報には○印のついた項目が多い。いずれも、韓国人達に「反日意識」を喚起する情報である。それは、韓国の子どもや若者の間に、日本の加害性という「歴史的事実の重み」を基盤に、小学校から中学・高校

へと成長するに従って、次の①～⑥のような社会過程が総合されることにより、戦後（解放後）五十年近くを経てもなお「反日意識」がより強く育成され続けていることを示唆している。



① 日常的に学校教育を通じて教えられる公的な事実(I) ② 日常的にテレビ・新聞等の情報環境による公的な事実とその再確認(II) ③ 日常の身近な人間関係や生活習慣に深く刻まれた私的な事実(III) ④ 慶祝日や名所・旧跡の碑文などによる、非日常的で聖的な価値に基づく公的な正当化(IV) ⑤ 家族や一族の忌日(命日)などで繰り返し確認される非日常的で聖的な価値に基づく私的な正当化(V) ⑥ このような韓国の現状を無視する(理解できない)としか韓国人達にとらえられない日本の側の対応と、その事実を増幅する報道(I)。

日本に最も近く国境(ボーダー)を隔てる国が韓国である。韓国のソウル市では日本の衛星放送を直接受信することが可能である。近年、日常的に両国を行き交う人の数も増加している。だが、それでもなお、文字通り「近くて遠い国」と評される

ように、両国の間にある壁は厚い。それを象徴する事実が両国の情報の量的質的差異であると考えられる。

このように、韓国では今なお過去の歴史に起因する反日意識が根強い。そのため公式には日本の現代文化は輸入禁止である。だが他方で、『韓国と日本』のⅢとⅣが示すように、『遊びの世界』(Ⅲ)や『日常生活に使用するモノ』(Ⅳ)の中に、『日本の現代文化』が実質的に浸透していることも否定できない事実である。実際には、ドラゴンボールやスラムダンク(日本の週刊漫画雑誌『少年ジャンプ』連載中)に代表される日本のマンガのハンゲル訳を日本とほぼリアルタイムで小・中・高校生が好んで読んでいる。そしてそのことを日本の新たな文化侵略ととらえ、さらにその内容が青少年に有害であるとの批判が教育関係者から繰り返し提起されている。

もともと、韓国内には、日本文化の良質な部分は許可すべきであるとの意見もある。特に、国際化時代を迎え日本文化を容認してもよいのではないかと、との韓国駐日大使の発言を契機に、現在、テレビの特集番組等により日本文化開放についての賛否両論が提示されている。韓国政府においても、教育部(文部省)を中心に開放の是非が論議されている。

しかし、韓国の知識人や政府がどのような判断を下すにせよ、冒頭に紹介したように、韓国の若者に反日意識という感情が確実に継承されている事実を否定できない。同時にその一方で、実際に日本のマンガが読まれているということは、日本の現代文化への欲求が存在することもまた否定できない事実である。

この矛盾する感情と欲求の間に、日本と韓国の新たな関係、とりわけ両国の若者の相互理解を創造するための契機を求めて、研究室(社会科学教育)の学生(三年生)とともに八月末から九月初旬にかけて韓国を訪問した。

同行した学生は八人、いずれも一九七三年生まれの女性である。一九七三年はオイルショックの年、したがって彼女たちは日本の高度経済成長終了時に生まれ、一九八〇年代に小・中学校時代を過ごした世代。経済大国になった豊かな日本の社会で受験勉強中心に育った世代として、いわばよくも悪くも日本の学校教育の完成品といえる。まして、教育学部の社会科学専攻の学年、当然、学校教育それも社会科学の影響を最も受けた学生である。その彼女たちが何を韓国で学んだか。

「みんな元気に歩いている、おばさんたちの迫力は日本と同じ」(独立記念館で)百四十本もの国旗がはためく光景、国に

誇りをもち、自分たちで努力してつくっている国、ガンバッテいる国だなんて「韓国の人達の目が気になった。過去にこだわらざるをえなかった」ことばが通じさえすればくらしやすい国だな……違和感がなかった、……(涙声で)その分、自分の国みたいに侵略していったのかな……「韓国の人に日本語を話させて申し訳なかった、ゆっくり見ることができず、駆け足で急いで見ることにになり、韓国の人に失礼であると思った」韓国は日本に似ている、もちろん過去に韓国から日本は学んだのだから当然ですが……思ったより今の日本に似ている「韓国人ってセンスがいいな、オブジェの並べ方など」「最初は興味がなかったのですが……日本人であることを初めてイヤと思った」徴兵は特別なことではないって聞いていました……ハンゲルができなくても英語で充分通じると自信をもちました「日本に留学したことのある女性から、私は戦争を知らないから、いつまでもひきずる必要がないと思う、っていわれどう返事をしていたのかからなくて……」「韓国の学生との(交流会)あとホテルに送ってもらっている途中で、六〇代の男性からなぜ日本人といっしょに歩くのか、と非難されました」「自分たちに都合の悪いことを学ばなければ本場の歴史教育ではないと思います」

これらは全て、一週間の交流の旅を終え帰国する前日の夜、ソウル市内のホテルで感想を述べあった時の彼女たちの言葉である。本誌の読者は彼女たちの言葉の意味をどのように解釈されるであろうか。私は彼女たちの偏見を排して事実に向かう勇氣と感受性の豊かさを高く評価したい。同時に、彼女たちにこのような学びを経験させてくれた韓国の人達(非難の言葉を投げかけた方も含め)とその文化に心から感謝したい。そして、一方でこのように素直で謙虚な心情を育んできた日本の社会を評価するもの、他方で、大学三年の研究の私的な旅行によってしか、一衣帯水の隣国の人々の感情とその背景となる自国との関係を理解し感得することができなかった事実の背後にある、日本の教育と文化(情報とその価値づけ)のあり方、とりわけ社会科学教育のあり方を、その功罪を含めて改めて問い直す作業の必要性を痛感した。

【このことについての私見は拙著『日本と韓国における青少年文化と意識構造の比較研究(その一)』(静岡学園短期大学研究報告第5号)、「日本と韓国における学校と教室文化の比較研究(その一)」「静岡大学教育学部研究報告人文社会科学篇第44号)を参照いただきたい。】

子どもの体力は子ども自身のもの 江刺正吾 (4)

主題 学習法における学力観

学習する力を育てる 中谷内政之 (6)

体育で育てる「学力」を考える 岩井邦夫 (12)

「しごと学習」論 その(3) 廣岡正昭 (18)

—問題解決力を育てる— 大津昌昭 (24)

実践

書的精神の高揚 濱田東起夫 (26)

ポピュラー音楽に取り組もう(六年) 後藤充郎 (32)

だれにしようかな 鈴木清次 (38)

三年「あまりのあるわり算」を使って 梶田萬理子 (44)

「おむすびころりん」を読もう

学習法 QあんどA

子どもの思いが出る彩色をさせるために 都留進 (50)

楽しく取り組む季節新聞作りのポイント 谷岡義高 (54)

授業づくりのポイント 自分自身のとらえや思いが出せる 小幡肇 (54)

高学年社会科学学習の授業

「できる」「わかる」は別 春名裕美子 (56)

—比とその利用(六年)— 若尾晴敏 (60)

カウンセリング的手法を 生かしてほめる 日和佐尚 (64)

■教師の日記 魚釣り 馬居政幸 (66)

《特別寄稿》

学生とともに 一衣帯水の隣国で学んだこと 馬居政幸 (66)

通信 (70) あとがき (72)

口絵写真：鈴木清次 序詩：稲垣和秋 表紙・カット：嶋守哲夫

